

『妻に聞いてもらうしかない批評』

花房 勇人

批評の前書き

私は滋賀県で10年ほどアマチュア劇団に参加している31歳の男性です。演劇は年に4、5回観劇し、読んだ批評は人生で10本あるかないかぐらいだと思います。演劇に関しては趣味の範囲でやっており、素人に毛の生えたようなものです。なぜこのような事を書くかと言いますと、これから批評を書くにあたり、簡単ではありますがどういった人間がどう言った気持ちで書くのかを述べておきたいと思ったからです。私はかねてより誰かの書いた批評を読む時に批評の役割のようなものを考えます。私の思う批評の役割とは、簡単に言えば演劇界への貢献です。ひと昔前は知名度のある方が書く批評が新聞に載り、客を劇場に向かわせていたのかもしれませんが。しかし現代では、知名度のある役者たちはSNS利用し手軽に情報を書き込み集客を行うようになり、批評も口コミのような形でSNS上に溢れるようになりました。私はそれは小劇場界にとってはいいことだと思います。しかし一方で劇評だけを見れば、長文の堅苦しい批評は人の目に触れる機会は減り、昔のような役割は薄れているようにも感じます。そんな中でどのような批評がこの「名前のない星批評賞」への貢献になるのかと考え、その答えとしてこの批評を1つの“数”として応募することが今私ができる貢献だと考え、今このような文を書いております。

私はこの「名前のない星プロジェクト」に直接関係はありません。しかし、このようなプロジェクトは応援したいと思っています。私は演劇で生計を立てているわけではありませんが、斜陽産業と言われる小演劇で新しい取り組みをすること自体が困難だということを少なからず知っています。そういったほとんどが、企画した人間の赤字で終わる事が多く、オペラのような赤字請負人がいる訳でもないからです。ですので、この批評には若干の鼻唄があることをあらかじめご了承ください。今回は『殺意（ストリップショー）』の批評を募集されていますが、私はこの『殺意（ストリップショー）』と「名前のない星プロジェクト」を切り離して語るのはいかがなものかと考えます。ですので、舞台作品のみを観て何かを書こうとは思いません。また、私はYouTubeの映像にて作品を観ますので、舞台の良さを100%感じ取れません。お客さんの空気感もわかりません。そのことを念頭において批評を読んでいただきますと幸いです。

批評

さて、前書きが少し長くなりました。ここから批評するにあたりいくつかの項目に沿って見てみることにします。私が演劇を見る時は大体、時代性、演劇性、好みでその演劇について考えます。しかしそれらを考える前に、観劇した最初の印象を書いておきたいと思っています。

『殺意 (ストリップショー)』という演目自体は私は初見で、見た時に、「簡単に批評がかけられる舞台作品ではないな」と思いました。正直に言えばかなり難しく、エンターテインメントというより小劇場のアングラ感の濃い文語調の一人芝居といった印象でした。三好十郎さんが書いた原作については、素晴らしい批評が数多く存在するので、私が何かいう必要もないと思いますので、ここでは簡単なあらすじだけ書きます。時代は戦前から戦後の日本、ストリップ嬢の緑川が自分の身の上話をしていくといった内容です。仮名で山田と言われる思想家が戦争中の集団心理によって自分の信念を変え、戦争が終わるとまた元の思想に戻る。しかし、その戦争中の思想によって緑川の想い人である山田の弟テツオは戦争に行き戦死してしまう。その事を恨んだ緑川は山田の殺害を企てるが、山田もそこらにいる人間と変わらないことに気づき殺害を思いとどまるといった内容だと思います。蛇足ですが、この内容を見たときに、ハンナ・アーレントの『エルサレムのアイヒマン』を思い出しました。

ではまず、時代性について書きたいと思います。この項目は“今”この作品を制作する意味について考えるものです。この作品が現代に発表されることが成功なのかという点を、私の視点から書いてみます。まず、「名前のない星プロジェクト」のコンセプトから、この舞台作品の入場料が 100 円であること、YouTube で無料配信されることを加味して、『企画も脚本も素晴らしいのに、その相性があまり良いとは思えない』というのが私の正直な評価です。入場料 100 円にする事は誰しにも観劇の機会を与えることと、何度も見て考察できるといったメリットがあると思います。しかし、誰にでも観劇の機会を与えるといった意味では、この脚本でその意味が薄まっているように感じます。玄人向けと言いますか、どことなく演劇関係者をターゲットにしたようなディテールへのこだわりと、ストリップや昭和の闇を切り取ったような時代背景は、若年層や観劇初心者にはハードルが高く、ある程度知識も要するものだと思います。例えるなら、とても大きくて開かれた扉があるが、建物の中は薄暗いといった感じでしょうか。一方で役者による口跡の違いや（演者の田上さんが X でつぶやかれた田上さん鈴江さんの舞台を見てから田口さんの舞台を見るのが面白いというのは個人的に共感できました）、脚本の深掘りを楽しめる無料配信がある状態が出来上がっているので、一度扉の中に入ってしまうと、企画が活きる脚本、演出であることは間違いがないと思います。そしてちょっと意見の割れるクラウドファンディングですが、一度挑戦されたことは意味のあることだと思います。

続いて演劇性についてですが、ここでは単純に演劇として面白いのかについて書こうと思います。よく「これは演劇ではなく映像向きだ」といった批評がありますが、私はそれは胡瓜の酢の物に「この胡瓜は生でかじるのが一番美味しいんだ」といっているようなものだと思います。簡単に言えば、そんなのは好みの問題なのだから実家で親御さんにでも話せばいい内容だと思います。さて、演劇として面白いかという点ですが、結論から申し上げて面白いです。単純に 100 分の一人芝居で多少の音楽はあるものの役者が話し続けます。ここに凄まじいエネルギーを感じます。先ほど少し触れましたが 3 人の出演者がおり、配信があるからこそ、それぞれの舞台を比べてみるができます。田上さんや鈴江さんはいい意味

でポップで重たい内容をスッキリさせる印象がありますし、田口さんの重厚な口跡はこの脚本に合っていると思います。原作では実際に肌を見せるようですし、台詞にある「脱ぐ」といったことの意味を大事にしている印象がありましたが、うまく役者さんのパワーと演出で、作品に違和感がないように思いました。それぞれの役者さんの各公演もみることができるので、その違いも楽しめると思います。しかし、今回私が見たのはあくまで定点映像ですし、はっきり言えば役者の表情がハレーションで見えない部分も多いです。音もいいとは言えません。これでは締めが定型文の、“演劇は生で見た方が良い”となってしまいます。大阪で活躍されている劇団 NG さんなどは配信するようの演出をされていたりするので、そこはいい意味での裏切りが見たい気もしました。

では、最後に好みについて書こうと思います。そんなものを書いても仕方がない気がしますが、今後、プロジェクトが続いていくことを考え、もしかしたらと思い書きます。私はSFが好きです。どうしてもいい情報でした。このように好みは千差万別ですし、観劇したことのない人は、自分がどのような演劇が好きかもピンとこないと思います。一般的に言われるように演劇は好みの作品に出会える機会は多くはないので、観に行くハードルの低いこのようなプロジェクトをぜひ利用してください。観に行かないと良いものには出会えません。演劇をしている方も、やったこともなければ見たことも無い方も沢山の劇場、劇団、役者、劇作家に出会ってください。月並みですが、演劇はいいものだと思います。

2024年8月30日